婦人と新社會

山田わか主筆

九月號

婦人と社會奉仕

第一期婦人運動の强敵は因習——婦人は男子の奴隷男子は本能の奴隷——政府は國家の事務所——デモクラシーの價値——政府と教育の關係——社會進步の根本手段は教育——教育は教育當局者の性質が反影する——社會教育の必要——社會教育と社會奉仕——婦人參政權の實際的價値——社會的分業と總合則社會奉仕

メリー・ウオルストンクラフト女史の女權と子供

女性の直覺

日々の感想から

落穗集

私の生立

毎月一回一日發行　第七號　大正九年九月一日發行

東京婦人と新社會社發行

婦人と新社會

TO ALL WOMEN

"Be not ashamed, women, your privilege includes the rest. You are the gates of the body, you are the gates of the soul. And I say it is as great to be a woman as to be a man. And I say there is nothing greater than the mother of men.

——Walt whitman——

恥づるな、女よ、
人類の創造は汝の特權である、
汝は肉體の門である、
汝は魂の門である。
女であることは男である
ことゝ同じく偉大である。
そして人類の母であることはあらゆる偉
大なるものゝうちで最も偉大である。

―ワルト・ホイットマン―

九月號



婦人と社會奉仕

第一期婦人運動の强敵は因習

今日迄の婦人論者、則ち、第一期の婦人運動者が强敵として戰つて來たものは因習の力でありました。婦人を其の因習の力の範圍外に導き出すことであり、そして、それを妨げようとする輿論を打ち破ることでありました。大多數の婦人の人格がゼロであつて婦人は全く男の要求通りに男の必要を滿すために自身をこしらへて行かうとつとめてゐる其の意氣地のない態度を競正しようとしたのでありました。歐米に於ては、

それは、既に過去の仕事でありましたが我が國に於てはまだ〳〵これを現在の仕事としなければならない理由が澤山御座います。そして、女に對する男の其の要求と云ふのは何にかと申ますと、それは、いろ〳〵の名によつて現はれては居りますが、併し、それを分解して見ますと美と弱と云ふことになつてしまいます。つまり、美しいと云ふことと弱いと云ふことを多くの男は女性に要求してゐます。弱いと申ましてもそれが病人を意味するものでないことは勿論でありますが。男が美を要求すると云ふことは受け取れるが弱いものを好むなどと云ふことはあるまいと普通人は申ますが併し、事實はいつも其の言葉を裏切つて居ります。新婦人協會が治安警察法の改正を請願致しました時、前代議士であつた或る法學博士が『婦人からのあの要求は全然正當であるから自分も賛成する』と仰有つてから、又、『けれども、そう云ふことを要求する女を妻にするのはいやだ。』と云はれたそうでありますが、本當に其の人計りでなく大抵の男の人は口では正々堂々と正しいことを云ひながら、併し、感情はいつも其れを裏切つて、そして、實際には矢張り、なよ〳〵した弱そうな理くつなどは全く知らないや

うな女を要求して居るのであります。

一般の男はそう云ふやうにまつたく無人格無見識な弱い女を要求してゐるのです。そして、女も女の親も、男のそう云ふ希望に添ふようにつとめてゐるのです。ですから、世間から善良な娘であるとほめられて、そして、あちこちからお嫁の口がかゝるのは全く自分の自由意志と云ふものゝない懦弱な女になつてゐなければならないのです。

美を要求すると云ふのは男計でなく凡ての生きてゐるものゝ要求でありますから、婦人が美の發揮につとめることは決して悪いことではありません。けれども、人間と云ふ分子を皆無にして、女性と云ふことを看板にして異性の歡心を買ふために衣服や髪飾りに全力を注ぐと云ふことは余りに無見識です。

淫奔な男の要求に應ずるため、不健全な氣分を造るために、おめかしに力を注ぐことや、自由に大きく發達することの出來る人格を無理無體に小さく不健全にして置かうとする其の弊害に對して今日迄の婦人論は極力戰つて來たのであります。

そして、それ等の婦人論者達の努力はいくらかの功を奏しまして、一部の婦人の眠つてゐた能力をよび醒しました。今迄、全く拘束されてゐた婦人の能力をよび醒しました。婦人の力に活動の自由を與へ、今迄は單なる消費者であつたもの、寄生蟲であつたものを生産者とし活氣なき生活に倦み果てたものを元氣あるものとしたには相違ありません。

婦人は男子の奴隷、男子は本能の奴隷

併し、婦人が男女平等の法律上の權利を獲得しても、つまり、國民として解放されても、まだ、女性としての解放の仕事が殘つてゐると前に申ましたが質を云ふと婦人が女性として解放されてゐないと同じやうに、男子も男子として解放されて居りません。云ひかへますと、人道的の立場から又は、社會的の立場から男子が本當の人間になつてゐないことは、婦人が本當の人間になつてゐないのと同じであります。不健全な男子の要求に應じようとする女も奴隷なら不健全な要求をする男子も亦奴隷です。

婦人は外部から、つまり男子から及び社會から奴隷にされて居りますのに反して、男子は内部から、つまり、我れと我が心で自分を奴隷にして居るのです。

男子は財力を所有し、其の時々の氣持ちに從つて女性を弄び、そして、そうすることが男子の人としての自由であるように心得て居るのかも知れませんが、人道的の立場から又社會的の立場から見ます時には、女性を弄ぶことは男子が性慾の奴隷になつて居ることでありまず、又、男子が財力の奴隷になつてゐる場合も決して少なくありません。婦人には自分の意志と云ふものがなく、全然、男子の意志及び外界の事情に飜弄されてゐると同じやうに、男子は男子自身の内部の俗悪な本能に飜弄されてゐるのであります。婦人が男子の玩弄物であると同じやうに、男子は自身の本能の力にいつも投げ飛ばされてゐるフートボールであるのです。

過去の文明の失敗はあの大戰爭となつて現れ、世界を擧げて人は皆驚きの目を見張り社會の改造、新文明の建設を翼ふやうになつたのでありますが、實に今、人間は、婦人計りでなく、男子も深い眠りから目を覺した處であります。自然（外界）の力や、

外敵を征服することが出來ても、自分のうちに潜む其の俗悪な本能の力の奴隷に自分がなつてゐると云ふ處に、やうやく、今人は氣付いて來たのであります。幸ひにして今、人は此の點に目が覺めて來たのであります。併し、まだ、目が覺めたゞけで、さて、その本能の力をばどう云ふ風に處置してよいか、又、今日迄に蓄へられて來た智識をどう云ふ風に整理すべきか、そして、利用すべきかと云ふ點に付いてはまだ少しも見當がついて居ないと云ふやうな狀態であります。

政府は國家の事務所

或る人はデモクラシーの實現によつて全人類が切望してゐる社會の改造、新文明の建設を計つてゐます。そして、これは可なり大きな勢力となりました。そして、普通選擧、及び、婦人參政權の要求となりました。普通選擧及び婦人參政權は、いゝの悪いの、正の不正のと議論する餘地は御座いません。この代議政體が存續する限りは必ず普通選擧にもなり、婦人も參政權を得なければなりませんが、併し、參政權と云ふ

ものは、一體、どの位、私共の生活に效果をもたらすものであるか？　又參政權を行使する機關、則ち、政府はどう云ふ性質を帶ぶるものであるかと云ふことも私共は考へて置かなければならないと思ひます。

或る生物學者の話に、動物が、其の進化の過程に於て、骨とか又は貝殼とか云ふものが出來てからは其の進歩は著しいものになつたとか云ふことがありましたが、人間社會も、此の國家と云ふものが出來て、私共の生活に根本的に必要な三ッのもの、則ち、外部からの保護、內部の秩序、及び、團體生活の幸福を計ることが出來たのであります。そして、政府は、國家のこの三ッの仕事をする、いはゞ國家の事務所でありまず。國家は我々國民のものであり、そして、政府が其の國家の事務であるならば、私共が、其の事務所の事務を監督するために政權を得て發言權を持たねばならぬことは、あまりにも明瞭であります。前にも云つた通り議論をする餘地はありません。

其處で考へなければならないことは、もと〳〵其の性質が根本的には事務所である政府が、私共の內部生活とどれだけの交涉があるかと云ふことであります。つまり、

其の事務所が、どれだけ國民の質を改善し得るかと云ふのであります。勿論、外敵を防禦したり、内部の秩序を保つたり、國民が餓へないように工夫することも重要な仕事ではあります。重用な仕事ではありますが、しかし、それが、私共の生活の全部ではありません。私共の個人としての生活に、うちへ盗人が這入らないように用心をしたり、餓へないように注意したり、家庭内に喧嘩が起らないように氣を付けたりすることは重用ではありますが、併し、それが生活の全部でないのと同じでありますす。

つまり、カイバ桶にカイバが一杯あつて馬の腹はいつもふくれてゐても其れだけではいゝ馬はできないのと同じであります。

デモクラシーの價値

今日の一派の論者はデモクラシーが政治組織の最後の形式だと思つてゐるようです。前にも云つた通り、今日の此の代議政治が存續する限りはそうならなければなり

ませんが、併し、今の處では世界で最も進歩した國のデモクラシーでも混亂と無駄と嫉みと利益の摑みどりの修羅場であることを私共は忘れてはなりません。

デモクラシーが文明に貢献する處は大きいと云ふのは噓ではありません。けれども、其の民主々義が國民を教育し、國民を訓練した上に、猶其の上に利他的本能に支配されるようになつた時、則ち、大多數の國民の本能が社會奉仕的になつた時でなければデモクラシーは本當に有效でありません。

政府ご教育の關係

此處で、私共が考へなければならぬことはデモクラシーが實現して私共凡てが政治に參與することが則ち、普通選擧が教育的價値をもつて、そして、其の教育的價値が政府の能率に影響し、從つて、社會の進步となるかどうかと言ふことであります。なぜなれば國民が無學であつては普通選擧は實行できても有效でありませんから、そして、これは政府と教育の關係の問題になります。これを云ひ直すと、文明の見地から

國家は國民の敎育をするために存在するのか、或ひは敎育が國家のために存在するのかと云ふことになつて參ります。或る學者は敎育は政府に從屬すべきもので、國民は政府の形式に添ふように敎育されべきであると云ひ、ナポレオンやビスマルクも此の說でありました。

けれども、現代獨逸の最大なる誇りの一ッは學問の獨立と言ふことでありました。もし、學問の自由が神聖なものならば眞の敎育は國家を支配するものであつて、敎育が國家に支配されべきものではないと云ふのです。けれども、私は敎育と云ひ、國家と云ふものは要するに社會を治めて行く機關の內外のやうなものであるから、敎育が國家に從屬するとか、國家が敎育に從屬するとか云ふことはないと思ひます。國家は個人の行爲を保護すると同時に制限するものであり、敎育は個人に自由を與へると同時に、自己制限を敎ゆるものであります。そして、この自由と制限は社會的奉仕の精神によつて調和されべきものであります。

ですから、國民は政治に參與すると同時に其の社會的奉仕の精神を養成されてゐな

ければなりません。そして、政治に參與する事は其の社會的奉仕の手段であると考へるようになつてゐなくてはなりません。個人の權利ではなく、團體生活の利益を計るための義務であると考へるやうになつてゐなければなりません。

社會進步の根本手段は教育

其處で、社會の進步には、先づ第一に人間の質を變へなくてはならぬと云ふことになります。そして、それは教育に待たねばならぬと云ふことになります。一昨年亞利加から交換教授として來て居られましたジユーイ博士は『社會進步の根本手段は學校である。』と云ひ、又、『國家の力以外には、教育程、社會秩序を保つものはない。』と云つてゐます。併し、教育は、往々其の本來の使命を離れて社會進步のために最惡なものになつたり、又は其の時代の惡い精神の反影であつたりすることを或る學者は摘發して『教育は今日の産業無政府狀態の現象に對抗し、そして、その力を弱くして行かなければならないものであるのに、却つて、其の惡い現象を反射してゐる。無政府狀

態の氣分を取り除く代りに、却つて、其の氣分を養つてゐる。同盟休校の如きが確に其の證據である』と云つてゐます。そして、又、

『今日の學校制度は、優等生になることの名譽を誇張することによつて、利己的な精神を教唆することによつて、極端なる個人主義を養ひ、産業界に無政府主義を造り出す準備をしてしまつた。』とも云つてゐます。

昔の教育家は、人間の智識は絶對的なものでなく、比較的なものであると云ふことを忘れて、相像して造つた眞理と云ふものを一かたまりとして置いて生徒に無やみに暗記させて丸呑みにさせ、自由な討議や、獨創的な意見を排してゐましたから、自然、發見とか新説とか云ふものはくびられてしまつてゐたのですが、併し、新しく起つた經濟上の變動が、舊い宗教的及び保守的の考へを打破して、そして、商業上の戰爭や冒險が獨斷主義を許さなくなつたと云はれてゐます。新事實が續出したゝめに、教育は教育自身の立場から其の科目に一ッの新しい問題を付け加へることも出來なくなつて、社會の要求からのみ、科目を取捨しなければならなくなつてしまつたと云はれて

ゐます。其の結果、次のやうなパラドックスが出來ました。『教育はたへず産業の進歩の後へついて來るものである。けれども、或る程度からの産業の進歩は教育が導くものである。』と。

いづれにしろ、教育は二ッの性質を持つてゐます。そして、其の一ッは過去の智識と熟練を保存すると同時に次代に傳へて行くものであり、そして、もう一ッは、絕へず新しい地へ持つて行つて、それを適用するのです。

教育は教育當局者の性質が反影する

そして、教育は教育當局者の性質、又は階級によつて、其の教育の影響に非常な差があるものだと云はれてゐます。たとへば、もし、教育が中流階級に支配されるならば、それは必ず中流階級の習慣を反射しますし、もし、貴族によつて支配されるならば、必ず、貴族の偏見と保守主義が教育のうちに流れます。英國の小說家ガルスウォーージーが、『英國の公立學校は階級を造る處だ。』と云つたのは此の意味からです。英國

の公立學校は宗教家や貴族の勢力の下にあるからであります。

獨逸の學校は柔順な軍國主義の學生を養成するように云はれてゐます。と云ふのは獨逸の學校は主として軍人階級が優勢だからであります。佛蘭西の學校は社會主義的であると云はれてゐます。それは中央教育當事者が可なりの程度に迄、過激な黨派に密着な關係を持つてゐるからであります。又亞米利加の學校は女性的であると云はれてゐますが、これは教師の過半數が婦人であるからであります。

私立學校は時とすると好ましくない計りでなく、有害な場合が往々あると歐洲に於ては宣告されてゐます。何せなればそれは智識の不平等を來し、又、もう一ツには私立學校は附帶物を多くする弊害があると云はれてゐます。たとへば軍事的に傾きすぎたり、遊戯に重きを置きすぎたりして、一般的智識の方面を害する場合があると云はれてゐます。

ですから、もし、アメリカのデユーイ教授が申しますやうに、社會進歩の根本手段を教育と致しますならば、私共は教育と云ふ言葉のゆるつたい一般的の意味を、もつ

と、はつきりさせる必要があります。そして、教育の實質を新たにする必要がありま
す。

個人を自由にすることが過去に於ける世界進步の指標でありました。權利のなかつたものが有權者になり、身分の故に働かされてゐたものが契約で働くようになり、少なくとも名に於ては各人平等の權利を持つやうになりました。

社會教育の必要

其處で、前にも申しました通り、此處に猶殘つてゐる仕事は自分から自分を解放することであります。今迄は外部の力によつて手足を結へられてゐたことの代りに、今度は各人が自由意志をもつて、自分の手足を社會と云ふ事に結へ付けなければなりません。一個人の幸福の代りに一般の幸福を計るようにならなければなりません。自分の利益のために社會を犧牲にすることの代りに、社會へ奉公することを喜びとし、名譽と考へるやうにならなければなりません。則ち、社會奉仕の精神を養はなければな

らないのです。そして、其の社會奉仕の精神の完成は社會教育に待たなければならないのです。

今迄の教育と云ふ字の定義は大抵、過去の智識の注入、訓練、個人の教化と云ふやうな意味でありましたが、社會教育と云ふ言葉は、勿論、其の個人的な教育の意味に對照させる言葉です。昔の其の個人的な性質の教育に後には生物學上の要素が入つて來まして、環境に順應するとか、選擇とか、中和とか云ふ意味が付け加へられました。これ等の言葉にも社會的と云ふ意味が含んでは居りますが、併し、社會教育と申しますと、お互の關係と云ふことに重きを置くのです。云ひかへれば、腕力や疑ひや模倣や、或ひは、自分と云ふものを基礎とした會合から離れて、同情と、そして、好意を基礎とした、より精選された會合と此の社會をしようとするのが目的です。同情と共同利益を基礎とした社會を實現することを目的とするのです。

勿論、社會教育と云ふことは社會主義を敎へるのではありません。社會主義的な教育でもありません。宗教學校に對する普通の學校と云ふ意味でもなく、倫理的修養と

云ふ意味でもなく、財産の平等化を敎へるのが目的でもありません。けれども、社會敎育と云ふことは、人はいやでも應でも社會的の動物であると云ふことを認めさせることであります。社會的の不調和は結局各人の發達を妨げるものであることを、しつかりと、認めさせることであります。

ですから、社會敎育は社會の無駄をはぶき精神的に物質的に社會の資本を造ることを目的とするのです。其の上に社會敎育は、社會問題の解決を目的とすると云ふよりは、一種の健康的な空氣を社會に造るのが目的です。云ひかへれば、社會の各人に、社會的智識と社會的力と、社會的能率と、そして、興味を創造することを社會敎育は意味するのであります。故に、社會敎育は學校を普通の智識を授ける外に社會關係を敎へる處と致します。そして、其處で未來の社會制度を造る準備をするのです。云ひかへれば、社會敎育は特種な社會關係を造るために一定の有識な訓練を施そうとするのであります。

社會敎育は順應的な依賴心のある人間を造るよりも献身的な人間を造らうとしま

す。つまり、受動的でなく、能動的な社會的の人間を造らうとするのであります。ですから、社會教育は一般的でなければなりません。凡ての人に對する機會均等、蓄積された有形無形の財產の平等な分配、壓制的な利己的な關係の代りに、親密な任意な關係を造らうとするのであります。

一言で申しますならば社會敎育とは、社會を自己のために利用することの代りに、社會奉仕の精神を特長とする人間を造つて、平和な社會的共同生活を創造しようとするものであります。

社會敎育と社會奉仕

この社會敎育によつて社會奉仕の精神が養はれて、始めて、社會には本當の進步があります。あらゆる變化が進步的になります。一個人の幸福の代りに、一般の幸福が標準でありますから世の中は平和であります。處で、今迄述べて參りました此の社會敎育を敎育の根本精神とすることが出來て、敎育法が全然新しくなつたと致しまして

も、もし、其の敎育を受入れる材料、即ち、兒童が、學齡に達する迄に、其の敎育を受入れ得る素質を造つて置かなかつたならば、其の完備した敎育法も殆んど無駄になつてしまうかも知れません。そして、其の完備した敎育を受ける素質、則ち、材料を造るものは全然母の仕事であります。

私はものを考へるようになりまして以來、民主々義に基礎を持つ女權の擴張に常に不滿を持つて居りまして、社會の平和、社會の進步には母の愛を押しひろげなければならない、子のためには全然自分を忘れる母の愛を人類に植へ付けて、人類の本能が全く利他主義になつた時に則ち社會奉仕の精神が本能になつた時に萬人の切望してゐる平和は實現する。そして、そうするには母の仕事を尊敬しなければならない、先づ何は置いても母性の保護が急務であると云ふことを主張して參りましたが、此の頃世間でも、デモクラシー〳〵と個人の權利を叫ぶのにもう厭きたのか、それとも、デモクラシーは思つた程有がたいものではないと云ふことを悟つたのか、やうやく、デモクラシーの反對の社會奉仕と云ふ聲を擧げて參りました。『中央公論』の夏期特別號な

どは此の社會奉仕の鼓吹と云ふことを主題にしてゐます。そして、これは喜ぶべき傾向であります。

婦人參政權の實際的價値

歐米に於ては殆んど其の終結に近つかうとしてゐる婦人參政權問題が、これから我が國に於ては又暫らくの間問題になるのでありませうが、此の婦人參政權問題に付いて一言お話して此の稿を終らうと思ひます。

婦人に迄參政權を延長することは政府の腐敗を矯め、政府の能率を增進する手段だと云ふことは今迄に度々云はれて居りました。今日迄にこれを實行した國の經驗によりますと其の利益はまだ充分に證明されてゐないと云ふことであります。のみならず、今日の狀態の下には婦人に選擧があつても政府の墮落が矯正されたり、政府の能率が上がつたりすると云ふやうな直接な効果は疑はしいと云ふことであります。今日の處では、實は、婦人が參政權を持つても、唯、今迄の選擧人、則ち、男子の有

權者に、其の有權者よりも一層無學な、一層公の事柄には無頓着な選擧人の一團を殖やしたに過ぎないと云ふことであります。けれども、婦人參政權はツイには婦人の上に教育上の感化をもたらすであらうことは考へられます。

民主政治である限りは婦人も選擧に加はるのが當然であり、かくして、始めて、民主政治が完全になるのであることは前にも申しましたが、併し婦人に選擧權を延長して國民が男女の區別なく參政すると云ふことが政府の能率を增すと云ふことは今も云つた通り、あまり當てにならないと思ひます。政府が變化して行く社會の必要に應ずるやうに一層の彈力性をもつて、そして、一層有效に働き得るように婦人參政權が役に立つかどうかは疑はしいのであります。なぜなれは、普通の國民が政府の仕事の多くに通じてゐないことは明らかであります。殊に重用な事柄に關してそうであります。

社會的分業と總合——社會奉仕

政府の重用な仕事のためには、其の仕事に關する特別な智識と特別な能力と特別な修養と特別な經驗を持つた人が必要です。現代は分業の時代であることはどなたでも

御承知ですが、外の仕事に分業が必要であるやうに政治も分業にして或る一部の人に任せて置いた方が却つてとくではないかと云ふことを私は頻りに此の頃考へます。民主々義の政府を持つて居る國民でも、公の仕事をするに適した人々に政權の大部分を任せて置いた方が却つて安全ではないかと思ふのです。戰爭前の獨逸の文明は先づ都市の文明と云はれてゐました。都市の行政の行き屆いてゐたことは歐洲に先づ類が無いものと云はれてゐました。そして、それは各部門が皆專門家によつて治められるゐて賄賂などの行はれる餘地は全く無かつたからだと云ふことであります。

今日迄の民主々義の政府が無能であつたことは、適任者に政權を委ねて置かなかつたことに原因があると云ふことであります。

政治は政治專門の人に、物を造ることは男の手に、人を造る、則ち、子供を育てることは女の手に、それ〳〵分業がはつきりすると同時に、各人が各目の使命の深い意義を悟るならば、それが皆社會的であることが明瞭となり、自然、利他主義、則ち、社會奉仕の精神が生れて參ります。そして、其の精神が各自の間を流れるようになつて、始めて平和な社會、進歩的生活が確立すものであると私は信じます。

メリー・ウォールストンクラフト女史の女權と子供

女子の教育は男子の要求に添はなければならない。則ち、女子は男子を喜ばせ、男子を助け、男子の愛と男子の贊成を得、男子を慰め忠告し、そして男子の一生を安樂になす事を本位としなければならない。これが凡ての時代に於て女子の守るべきもので、女子は其の幼少時代からこれを教へられねばならぬ。とルソーは主張した。

メリー・ウォールストンクラフト女史はこのルソーの主張に反對して、戀愛と結婚に對する急進的な意見を發表し、十八世紀の後半を驚倒させた。

女史は英國の立派な一家庭に生れたのであつたが不幸にして未だ年若き時から小學校の教師となつて生活を立てねばならなかつた。碩學ドクター・ジョンソンと女史が知己になつたのはこの頃であつた。氏は女史に非常な興味をもつて居た。で、女史が

ロンドンの有名な出版會社の顧問並びに反譯者としての地位を得たのは同氏の斡旋の結果であつた。後、女史はパリーに行き、あのフランス大革命の活劇を目擊して居つた。

女史が英國に於て、婦人の政治的自由を要求した時にフランスに於てはコンドルセが同じ要求をして居たし、又、合衆國に於て奴隷廢止の運動が盛んであつたのもこの時であつた。女史の行動はその頃非常に突飛に見へたのでホレース・ワルポールは女史を稱して a hyena in petticoats（女袴をはいた鬣狗）と云ふたが、これはワルポールが全く女史の人格と女史の目的とを知らなかつたからである。女史の夫ウイリアム・ゴドウインやキーガンポールや及びペンネル夫人の著書によれば、メリー・ウオールストンクラフト女史が稀に見る純な、高尙な人格の婦人たりし事が明瞭である。

女史の生來の銳い機智は女史の遭遇したあらゆる不幸によつて一層銳敏にされ、そしてこの機智が彼女をしてあらゆる虛僞を打破せしめたけれども、この機智は決して女史の高尙な義務の觀念を低うはしなかつた。又家庭生活の神聖を汚しもしなかつ

た。女史の夫は彼女の死後、彼女が家庭生活の崇拜者であつた事を發表して居る。で、もし、人の容貌が意義あるものであるならば、今日殘つて居る女史の肖像は確かに其れを語つて居る。

女史は女史の『女權の擁護』に於て、確かに彼女の時代に一世紀以上進んだ思想を發表して居る。則ち、婦人が因襲の奴隷であり、夫に服從する事が敎會によつて支へられ、法律によつて勵行されて居た時代に、女史は大膽にこれ等及び他の傳統的な意見と全く反對な思想を發表したのである。女史は兩性共同敎育を主張したのみならず、猶、進んで、男女間の智力的なそして眞の意味の伴侶たる事は、この兩性共同敎育が實行される迄は實現されるものでないと主張した。ルソーは云ふた。女子を男子と同じやうに敎育すれば即ち、女子が男子のやうになれば、女子は最早男子の上に何の力をもたなくなる、と。これに對して女史は次のやうに云つて居る。『これが則ち私の目的とする處である。私は婦人が男子の上に權力を持つを好まない。けれども婦人は婦人自身の上に力を持つべきである』と。

女史は、人間の智力的の方面は尤も要用である事を述べた後、結婚を墮落させる總ての因襲的思想を極力排して居る。成功した結婚は常に單なる生理的の引力よりは深き或るものによる事を女史は認めて居る。そして、云ふ、『戀愛は其の性質上より云へば一時的のものであらねばならぬ。其れを永久的にしやうとする秘密を求むる事は不可能であらう。もし、又、其の秘密を發見した處が其れは無用である計りでなく、それは却つて人類に有害であらう。人生の義務を果し、そして德性をつくる種々の職業を力強く營むためには、夫婦は強く相互ひを情熱をもつて愛してはならない。一つの目的に沒頭しない心は勢を缺くかも知れないが、併し永く一つの目的に沒頭して居る事は遂ひには矢張り、其の力を弱くするものである』と。

女史は其の獨創と精力に於てはマダム●ド●スターエルに等しい。けれども其の意見はスターエル女史よりも遙かに急進的である。ウオールストンクラフト女史は兩性の差別を撤回する事に雄辯を振うた。女史の意見によれば、婦人は、論理的に云へば要求すべき權利をもつて居ない。何となれば、婦人も男子と同じく人間である以上、男

子と同じやうな權利義務は、要求する迄もなく、當然もつて居るが故である、と。女史は現代の進步した婦人と同じく、大抵の婦人の、所謂あまりに婦人らしきに反對して居る。即ち、所謂家庭の義務にとぢこもり、狹き生活の範圍に婦人が居る事に反對して婦人は充分なる經濟上の獨立を得る迄は到底發達し得ざる事を力說して居る。

或る人は言ふ。ウォールストンクラフトは彼女の時代の婦人に進んで居つたのみならず、今日に於てすら彼女の叫びは極く少數の婦人の外には未だ聞へて居ない。彼女は、今日猶、全面に出て居るから、現代の婦人參政權運動者も彼女に從はざるを得ない。又、性慾の自由を最も大膽に斷定したのも彼女であつた、と。

女史はアメリカ人であつたキャプテン・イムレイと數年間同棲した事によつて、性慾の自由を實行した。けれども、後に、遂ひに、女史は彼を去つた。そして、ウイリアム・ゴドウインと同棲するやうになつた。女史並びにゴドウインは今日迄に於て、最も頑固な智力上の叛逆者であつた。併しながら彼等は彼等の間に生れた子供の權利には結局降伏したのであつた。女史の著作の重なるものを擧ぐれば『人權の擁護』『フ

ランス革命の回顧』『女權の擁護』及び小說等である。

イプセンが『人形』と云ふ言葉を婦人に與へた八十四年前、則ち今から百二十五年前にメリー●ウォールストンクラフトは、既に婦人の生活を『自動人形』と云つて罵つて居た。そして、女史は英國に於ける婦人參政權論者の最初の人である事は前にも云つたが、女史がルソーの主張に反對して猛然立ち上がつた時女史は僅か六週間の日數で、今日猶智力階級を導いて居る『女權の擁護』を書き上げた。勿論、それは婦人を侮辱したルソーの主張を反駁したもので二百八十二頁の本である。この短時日のうちに出來上つたこの著作は精細に見れば疎漏な點がないではないが、併し、それは全體の價値に決して疵をつける程のものではない。其の威力は依然として其の光りを射つて居る。

凡そ、婦人論のものでメリー●ウォールストンクラフトの名が引いてない本は殆んどない。そして其の名と同時に『女權の擁護』(Vindication of the Right of Women, published in 1722) と云ふ文字が必ずついて居る。

この『女權の擁護』の卷頭に女史は『人間の權利と義務』と云ふ一章をかゝげて次のやうに書き出して居る。

今日の社會狀態に於ては、最も單純な眞理を見るにも、先づ、第一原則に溯り、其處から出發して、そして、とう〳〵と漲る偏見を一寸づゝ論破して行かなければならない。であるから、今、私は自分の議論を進めて行く準備をする前に、全く平易な分りきつた質問を二三發して見る。そして其の答へは道理の基礎となつて居る公理と同じやうに眞に明かなものであらう。けれども、明かであるにも拘らず、これにいろいろな動機がからみついた時には、それは言葉によつてか或ひは行ひによつて、本式に反對されるものである。

『人間が萬物の長たる所以は何か?』

と問はるれば、其の答へは、分は全よりは小なりと云ふのと同じやうに明白に、

『人間のみが道理を持つから』である。

『こゝにAとBがあつて、AがBに勝つて居るとすれば、其のAが勝つて居る所以は

何にか？』

と問はれるなら、

『Aの德が勝つて居るから』

と云ふ答へが自然に人の口を出るであらう。又、

『情は何のために人間の心に植付けられてあるか？』

と云ふ問ひに對して、

『人は情と爭ふ事によつて、獸類の持つ事の出來ない智識を得る』

と經驗が答へる。

故に、人の完全さと、幸福の大きさは其の人の持つて居る道理と德と智識によつて計らなければならない。そして、又、これが個人々々の差別をつくるのであるし、且つ又、社會をまとめて居る法律の運用を率るのである。もし、我々が人類を集合的に見るならば、我々は道理に從ふ事によつて、其處から智識と德が自然に流出すると云ふ事實を拒む事は出來ない。

人間の權利と義務とをかくの如くに單純にして見ればこれ程明らかな眞理をくどくどと說明する事は殆んど人を侮辱するやうな感じがする。併し、人の心に深く〳〵喰ひ入つて居る偏見はかくの如き明白な道理をも曇らしてしまつて居る。從つて、德の名を犯してゐる贋造物がいくらもある。種々の偶發的な事情のもとに眞理が不注意な錯誤と比較されたりして、複雜と誤解が混亂して居るから、我々は矢張り、分りきつた原則にたどつて行かなければならないのである。

人は、一般に、彼等が何處から持つて來たか分らぬ偏見を根こぎにして捨てるかはりに、むしろ其の偏見を正當とする理由を構成したがるものである。人は、自身の原則を決斷的につくらなければならない筈であるが、世間に充滿する智的卑怯者は其の原則をつくる事を恐れたり、又は、つくつても半分位ひの處でとゞめて置いたりする。そして、この半分の原則がしば〳〵完全なものとして通用して居る。半分の原則とは、そのうちに幾分の眞理が含まつて居る事を私は云ふ。則ち、正しいに相違ないが、狹い見解を土臺としたものであるから全體から見ては役に立たないものなのである。

第一原則から出發した正確な道理に、誤解は及向ふ事は出來ない筈であるが、淺薄な思想家は、第一原則よりの流論を面倒過ぎるものとして反對して、そして、中心の腐敗したものを却つて、有利なものとして考へる。そして彼等は、所謂、其の有利を原理と心得、ついには、動かすべからざる眞理を言葉の霧をもつて覆ひ、德を形式化し、そして、智識を、唯、音をたてるだけのものにしてしまう。これ皆、偏見が其の名を犯して居る結果である。と。

× × × × × ×

社會をつらぬいて居る不調和、不幸の中にデクノボウ達と押し合ひ、へし合ふ事に疲れて、ルソーは孤獨を好むやうになつた。そして同時に樂天家であつた彼は非常な雄辯をもつて、人間は生れながらに孤獨的な動物であるなどゝ云つた。又、幸福を與へるために、人間に生命を授けた神の善を尊敬するのあまり、彼は禍を肯定的なものとし、それを人間の造つたものだと考へた。で、彼は、神の完全には等しく必要なる

一方(女)を犧牲に供して他の一方(男)を稱揚して居る事に氣が付かなかつた。こう云ふ風に筆を起してウォールストンクラフトはルソーの矛盾した宇宙觀及び婦人を侮辱した嘘議論を滔々と論破して居る。これを御紹介したいのは山々であるが、或る程度迄女史の意ある處を御傳へしやうとしても、隨分長くなり過ぎるやうであるから、この章は、唯、これだけ、一寸見本位ひでやめて置いて、わりに短い『親の愛』矢張り、『女權の擁護』のうちの一章を譯して見る。

親の愛情は、恐らくは、よこしまな私愛が最も盲目的に變形したものであらう。勿論、眞の正當な親の愛が其の愛情の外に存在して居るには相違ないが。フランス語には其の正當な愛と、それから、人間の弱點が現す露骨な愛とを區別する別な言葉であるが、英語には其れがない。大抵の兩親は彼等の子供を最も動物的に愛して居る。そして子供の進歩を計るに急であつて他の一切の關係を犧牲にする。そして、未來の幸福を増進しやうとして現在の子供の生存を最も壓制的な權力を用いて苦しめる。が、これは無主義な偏見がネジケたものである。權力は其の性質上常に其の原則に從つて

其を行ひ、全く、制裁も研究もなしに他を治めやうとするものである。權力の玉座はいつも暗黑裏につくられてあつて、如何なる日も其處をさぐり見てはならない事になつて居る。土臺なき構造物は研究さるればグラツキ出すからである。服從、則ち、無條件に服從させると云ふ事が凡ての種類の暴君の通語である。そして、其の權力の保證をます／＼確かならしめやうとして、一つの壓制を支へるに、又、他の一つの壓制を用ひる。人生のあらゆる關係に於て、道理が義務の原則を明らかにすれば暴君は戰慄するに相違ない。何となれば道理の光りはこの地上に完全な日が來る迄其の光りを擴げて行く事を止めないから。そして其の光りに浴すれば如何に無學な臆病な人でも、うすくらやみに鎭座して居る妖怪を見て微笑せざるを得ないであらう。

多くの人の親としての愛情は、唯、子供を壓制するかこつけに過ぎない。そうせずともすむ事なのだが。善良な賢い親は道理に從つて自分の主張を立てる。であるから其の主張には權利があると信じて居る。唯、彼等は正しきに從つた進行が途中で消滅する事を恐れる。何となれば、彼等は、人間は啓發されゝば、される程、正しい單純

な原則をかたく掴み得る事を信じるから。彼等は、單なる利益をもつて滿足しない。或ひは哲學的に異なるものが實際にはそうでないと云ふ事を知らない。彼等は革新を是認すると同時に、表面だけのものゝ移り變りを卑しむ。そして、利己主義或ひは嫉みからのあざけりも時がたてば無くなると考へて、平然として居る。

もし、過去を回顧する力、及び、未來を豫想する鋭い眼を持つ事が人間の偉大なる特權であるとすれば、或る人々はこの特權を甚だ狹くして持つて居る。そう云ふ人には新しいものは何でも間違つて見ゆる。そう云ふ馬鹿氣たものと道理あるものとの區別がつかないから恐れる理由のないものを恐れ、そして、道理から逃げる。恰も、道理は燒火箸でゝもあるかのやうに彼等は思つて居る。だが、頑迷な彼等の手もしつかりした革新家の手を束縛する事は出來ない。

大抵の婦人はあらゆる偏見の奴隸になつて居るから進歩した賢明な母としての愛をもつて居る婦人を我々はめつたに見る事は出來ない。多くの母は子供を忘れて居るか、さもなければ可愛いがり過ぎて子供をだめにしてしまう。前にも云ふた如く、大抵の

母の愛は、全く動物的で、人間味をぬきにしたものである。正義も眞理も何にもかも犠牲に供してしまうから、彼等は子供のために最も神聖な義務を破るのである。則ち、この地上の一種族をむすび付けて居る共通關係を忘れて居る。一つの義務、一つの愛情のために、他の義務他の愛情を無視するものは其の一つをも滿足に果す事は出來ないものである。彼等は遂ひには義務の尊敬すべき事を忘れ、義務を氣まぐれなもの丶やうに思ひ違へる。

子供を養育すると云ふ事は自然が女の人格に與へたる大なる義務の一つである。故に、婦人はこの義務を適當に考へるならば、彼女の理解力は強くなり、多くの有力な議論となる。

精神修養は、云ひかへれば智力の敎育は、ごく幼少から始めねばならぬ。殊に、氣質は最も嚴格な注意を要するものであるけれども、其の注意は、唯單に子供が自分の子供であるから愛すると云ふやうな母には出來ない。又、瞬間の感情によるやうな、子に對する義務の根本の意義を考へないやうな母には分らない。そう云ふ不完全な母

が極端に走つて、子供を猫可愛がりに可愛いがつたり、又は、不注意に流れたりするのである。いづれにしろ、不自然な母が多いのは彼女等がこの愛情の道理を知らないからである。

良き母となるには第一常識をもたねばならぬ。そして又夫にのみ頼るやうに敎へられた女の持つ事の出來ないやうな精神の獨立をもたねばならぬ。一般から云ふと、へりくだる妻は馬鹿な母である。そう云ふ母は自分の子供に自分を愛させる事を求めてそして、子供と一所になつて、ひそかに、父親に反抗する。そして、彼女は父親を案山子として子供に示す。

婦人の理解力が遠大になつて、自身の行爲に對しては、自身で制裁をし、其の人格が强くなるに非ずんば、婦人は子供を敎育するに適當な常識と氣分をもつ事は出來ない。又、子供に授乳しない母は母と云ふ名稱を得る資格がない。授乳の義務を果す事によつて婦人は母の愛情を感得する事が出來るのであるから。惡德をよけるに最も堅固な保證になる愛情を創造する事は、避くべからざる父母の責任である。所謂、生れ

ながらに持つて居ると云ふ愛情は甚だ薄弱なるものである。愛情は相互の同情を授受する事によつて生れるものである。子供を他人の手に託する母が如何なる愛情を子供にそゝぎ得るか。乳母の手から子供を學校に送る母が如何なる眞の關係を子供との間に持ち得るか。

母としての感情を働かす事は、婦人にとつては、戀愛の感情を働かす事のかはりとなる。即ち、戀人の關係が單なる友人關係になつた時、相互の親密さが單なる尊敬に變つた時、天は其の代りとして婦人に子供を與へた。子供は緩まうとする夫婦間の愛の紐をソットと締める。そして、父母の子に對する注意が新しい相互の同情を生む。かくの如き、夫婦間の愛情を繋ぐ子供を他人の手に託すのは、其の愛情を段々と薄くする事である。

のみならず、兩親の愛情が子の孝行の義務を創造する。自分の義務を他人の手に果させ、そして其の報酬を自分に受けやうとするのは餘りに烏滸がましい事である。



女性の直覺

近世生物學の見地から、婦人の直覺に付いて注意すべき最も重要な點は、これは元來母と子の保護を唯一の目的として特に非常な發達をとげた、一ッの能力であると云ふ事である。婦人の直覺は母の本能の一部分であつて、そして凡ての他の本能と同じく、其の働く目的が狹ければ狹い程其の鋭敏さと精微の點を增すものである。婦人の即刻な、正確な判斷力――彼女自身或ひは彼女の子が危險に陷つた場合に如何に處すべきかに付いて――は、人類が動物の域をやうやく脫した頃の、人類の歷史中に發達したもので、そして其力は彼女並びに彼女の子供に降りかゝる危險を防ぐのが唯一の目的であつた。彼等に降りかゝる危險の度は、人類の智力の增加に從つて、又人類が地球上に散亂して行くに從つて、益々多くなつて行くのであつた。そして此の直覺の力は文明の元來及び進步と共に漸々と複雜になつて來てそしてあらゆる方面からの襲擊、爭鬪、及び凌辱から彼女の家族を防護して來たのである。文明最高の時代に至つては、其の力が婦德を守るために絕へず働いて居る。男の不忠實を看破つたり、誘惑や、さま〴〵の陷坑から青年子女を保護したり、非道な夫や慘酷な父の虐待を避けたり、男の浪費や放縱を抑制したり、其の他あらゆる方面に婦人

の直覺は活動して居る。婦人の頭腦はかやうな問題に對しての判斷力を既でに蓄へて居る。其れは彼等の腦のうちに、生れながらに發達した適當な神經作用の外皮中樞と共に、無限な過去の組織だつた經驗を遺傳されて居るのである。故に、いざと云ふ場合に婦人は思案して居て、後れをとるやうな事はない。彼女或ひは彼女の子に危險が迫つた時、婦人がのろい智的作用によらなかつたゝめ、後れなかつた例は全歷史を通じて明らかである。彼女は即時、事を處さねばならぬ。さもないと敗亡に歸する。自然淘汰はかく働き得る婦人を保存する。近代社會に於ても矢張りさうであるが併し其れはアヂソンの云つた、

『思索する婦人は敗亡に歸す』

と云ふ言葉よりは、もつと廣い意味に於てゞある。此の婦人の防衛的性質は幾人かの著者によつて照會された。スペンサーは彼の『社會學の研究、三七六頁』に於てこう云つて居る。

『野蠻時代の女は彼女の粗暴な夫の動作、音聲、及び面色によつて彼の心のうちに兆しつゝある怒氣を看破し巧に危險を避ける事が出來た。けれども男の感情の自然語を讀むに不熟練な女は往々此の危險に遭遇しなければならなかつた。で、女が絶へず此の力を運用して居た事、及び此の力を多量に所有した婦人が生延びたと云ふ事實から、我々は此の力の確定を女性の能力と推知し得るのである。通常此の女性の能力——人の身振りによつて其の人の心の狀態を知る敏捷な働き—

ーが直覺となるのである。歸せらるべき論證はないけれど、此の力が、もし心理解剖の熟練と合する時には、此れはめつたにない事だが、其の結果は他人の心の狀態を解釋する驚くべき能力となるのである。』と

けれども我々は女性の直覺を了解するためには猶もつと遙か前時代へ溯る事が出來る。動物が、他の動物を欺くために、或ひは、殊に、雌を得るための同種族の間に於ての競爭中に得た雄の直覺的知解力は或る程度迄雌の上に反射した。ために、此の直覺的知解力は全然、雄の持性となり終せなかつたのである。そこで、雌が幼獸を番守する時、働かせる力は此の直覺的知解力の稍々かたちの變つたものである。そして此れが、私は信じる、今、充分發達して居る女性の本能の本當の根元である。そして此の力は重もに彼女の幼兒の上にあつめられる。殊に最も發達した婦人に於てさうである。

此の根本的な女性の特色はいろ〳〵の方面に現れて居るが、常に防禦的であると云ふ事は其の重もなるものである。女性の最大目的は擁護である。そこで彼女の責任なる、未來の種族の安全を計るために彼女は知力を發達させた。そして最少の危險をも知覺して、其れを避けるに油斷がない。彼女は決して危險を冒さない。老練な船長は常に安全な進路を選む。二進路があつて、兩方とも全く安全に思へる時にも、猶其の上にも安全の方をと彼は思慮を運らす。此の表面の臆病は不屈な船乘業者の有名な不敵さとは矛盾し

て居るやうに見ゆるが、併し此れは、海上にあつては常に安全な進路を選むと云ふ動かすべからざる、原則の結果である。女性の心理も亦こう云ふ性質の注意をもつて居る。そして此の注意は、航海に計りでなく又或る特種の危險に對して計りでなく、あらゆる事柄の上に働らいて居る。如何に安全な狀態のもとにあつても、もし此處に二つの道があつて、其二つの間に少しの差でもあるならば、彼女は必ず、より安全な方を見定めて選むのであるが彼女が、かく、見定めて選むだからとて、其れが必ず彼女のために安全だとは限らない。其れは唯想像の安全である。彼女は常に判斷の基礎を經驗の上に置く。であるから彼女のとる道は、以前に彼女が一度通つて、そして安全であつた其の道である。もし、外に、遙か、其れにも優つた道があるとしても、それが未だ經驗されない道であるならば、彼女は其れをとらないのである。他人の經驗からの、或ひは自然の情勢からの如何なる有力な議論も彼女には滿足でない。此の女性の心的狀態は人生のあらゆる方面に現れて居る。そして其の特性の中心は極端な保守主義である。凡ての革新は、危險の伴ふものと見て居る。現在の生活狀態が、たとへ、價値なきものであつた處が革新を企圖して危險を冒すよりは、ましだと云ふのである。かくして、婦人は、發達の堅く固定した狀態を保つ社會の平衡輪となつた。此處に婦人の直覺は適應するのである。

婦人の此の根本的保守的の性質から、

婦人に改革家としての資格のない事が想像出來る。なぜなら、凡ての改革は現在の秩序を改良するのにある。こう云ふと、あの有名な事實——數多の婦人が改革家である事、幾多の改革が婦人に指導されて居る事、又政權獲得に對する婦人の論證は、彼等は男子等の企て能はぬ改革を開始し、のみならず、改革家としては男子の及ばぬ强硬と熱心を持つて居ると云ふ、主張の上にたてられてある事——は此の論旨に矛盾して居るやうに思へる。けれども其れは外見だけがさう見えるので、實は其等の事實と本當の保守主義とはよく一致して居るのである。或ひは、むしろ、保守主義だけでは、全體としての婦人の性質を說明する事は出來ないとも云へる。もつと正確に云へば、婦人の保守主義は、彼女の周圍の狀態や、制度やに向けられずに、唯、彼女自身と彼女の子の上に聚められたので、彼女の性質のうちに染込んで居る制度の保存ではなく自己保護であるのだ。それ故、彼女の保守主義は自己保護に都合よき制度だけに限られてある。如何程、改良の餘地あるものに對しても、其れがそれだけで役にたつて居る限りは彼女は其れに改良を加へやうとはしない。が、男子は、此れを、絕へず實行して居る。男子は、單に役にたつ、無いよりはましでは滿足しない。彼等は改良出來るものなら改良しやう、最上の點迄改良して行かうとする。此れが眞の改革である。此れに反して、婦人の從事して居る、所謂、改革は決して眞の改革ではなく、言はゞ革命に近い

ものである。彼等が改革しやうとする制度は彼等が有害と信じて居るものであつて、そして彼等が着手した改革の仕方は其等の制度を廢するにあるのだ。其れは常に自己保護である。不善は危險であると云ふ處から、婦人の改革は、彼等自身並びに子等の安全を計るため、眞の或ひは想像の、惡に對する聖戰であるのだ。であるから、最も根本的な改革は、永い間、はぐゝんで來た、最も完全な保守主義である。

故に女性の直覺は、男性の欲求の目的物を得るに用ゆる直覺とは、大ひに異つて居る。男性の其れは、快樂を求むる心の力の支柱である。そして生存の第一の作用を成就するのである。此れを、女性の消極的、受動的直覺に對して、積極的或ひは他動的直覺と云ひ得る。女性の直覺は他動的に、或る仕事或ひは企圖を求めない。それは必要な場合の活動を用意はして居る。或ひは、企てられたる行動を、もし其れが不利と思へる場合には、喰止めはするのである。一歩進んで兩性の直覺を比較すれば、女性の其れには詐りがない。けれども男性の其れにはその根本の特性として詐欺の本質をそなへて居る。が、或る範圍迄は此の二つの種類の直覺は男性女性兩方にも屬して居る事、又心の一般の性質としての直覺的判斷力は、女性特有の直覺から根本的には區別のない事、又婦人に於ても直覺的理性が往々よく發達して居る事等は事實である。けれども兩性の心的構造を廣く對比して見ると直覺的理性と言ふ言葉に含

まれた其等の性質――敏捷、外交手腕、戰略等――は卓越した男性の特色で、そして其れは社會の他動的、積極的、進歩的要素である。此れに反して直覺的判斷力を構成して居る、受動的、消極的、內氣、疑懼、及び警戒的保守主義の要素等は女性の特色である。

故に、凡てを斟酌した後に、こう云ふても恐らくは云ひ過ぎではあるまい。則ち直覺的能力は男性と女性と、はつきり別に二筋になつて發達して來た。知的能力も亦、男幹と女幹とが實際に存在して居た。で男の方は扶助及び繼續に、換言すれば他動的な增進、發達、或ひは進步に、女の方はタイプ(型)の永存、不撓、受動的鞏固に適用して來たとして考へられる。そこで男性能力の優勢なる特性は剛勇で、女性の其れは愼重である。此の二つの心理學上の要素は、二つの生物學上の要素、則ち男性の適應と變化性に富む他動性と、女性のタイプを永存し、遺傳を取次ぐに都合のよい受動性とに、並行して居る。此の男性、女性の特色は社會學上の二つの要素、則ち進步と云ふ常に存在して居る破壞的要素と、此れを抑制する秩序と云ふ保守的要素、とに類似して居る。

一般的女性の直覺及び特種な婦人の直覺に付いての結論を此處で云ひ殘してはならない。知力よりは感情が先で、そして其れが一般に要用であつたと云ふ見解から、感情に豐富である婦人は、社會經濟から見て、少なくとも、男子と同等の位置に置かれる筈である。又知力の發達

の見解から見ても、婦人は男子と相並んで、歴史前から、社會以前から、否々人類が人類に至る以前から、男の偏頗な、無鐵砲な、氣儘な行動に、必要な補充を與へて來た。婦人の補充がなかつたとしたら、人類は歪曲し、亂れて進歩の方向には行けなかつたかも知れない、男子は此の進歩を、彼單獨の仕事であるとして は居るが。故に知力の範圍内に於てゞすら――男子が優勝權を請求して居る處だが――婦人は彼と平等である。婦人は、人類進歩に依附するあらゆる名譽を等分し享有すべきである。(ウオード)

謹告

本誌は八月號迄東洋出版社が發行して參りましたが本號(九月號)からは私が引き受けまして東京四谷區南伊賀町四一番地へ『婦人と新社會社』を設立し、此處から發行することに致しました。編輯用並びに營業用一切の御通信を本社宛に御願ひ致します。

日々の感想から

原田琴子

○

この頃私の出身學校の二つともから寄附金募集の報知が來た。それには學校の發展を計るため、學校の基礎を確實にするため、地所の購入や校舍の增築を必要とするので少なからぬ資金を要するところから、各卒業生に幾口なりとも寄限をして貰いたいといふのである。もとよりそれは學校からぢかに送られたものではなく同窓會の幹事から發送された體になつてゐる。

私はその募集の趣意書をひろげたまゝ、茫然として思案にくれた。そして重苦しい氣分になつた。その寄附のたつた一口である三十圓乃至三十六圓といふ額すら、私にとつては大金なのであつたから。

凡そ自分の出た學校の繁榮を欲しないものとてはないであらう、ことに常に自分の誇としてゐる多くの女學校の中にもことに人格教育を標榜してゐるところの學校の隆盛を。だけれども感情がどうであらうとも理屈がどうであらうとも、現在の私は學校の發展のために何ものをも資することをなし得ない無力者なのである。私は日本の多くの女のやうに自分自身の財産を持つて居ない、また自分

の職業も持つて居ない、私は夫のペンに依て日々を暮してゐる、私と私の子供とは「扶養せられる家族」なのである。しかも私達の家庭は決して經濟的に餘裕のある家庭ではないのである。

私ははてしもなく惱ましい思ひをした。私は心の底からお金が欲しかつた。そして次ぎには何でもいゝ自分で働いてお金がとりたいと考へた。

私はふだん別に美しい着物がきたいとも思はないし、櫛一枚でも買ふのは無駄なことのやうに思はれて、無くてもすませる方だつたから、これほどに深く物質欲を感じたためしはかつてなかつたことであつた。學校を卒業した當時のあの感激に充ちた愛校心が再び私の心に波打つた。さはいへ私は夫が夜も眠らずに筆をとつて得た報酬を、しかも豊かでもない經濟の中から割いて貰ふといふ事を忍ぶ氣にもなれなかつた。結極「自分で生産的に働きたい!」と思ひあせるばかりだつた。

私は更に考へた、私一人ばかりではない、校友の幾人かは私と思ひを同じうすることであらうと。更に日本の婦人の幾人かは私と思ひを同じうすることであらうと。

○

私の母はある重い病氣のために病院へ入つて非常に大きな手術をした、そして一時は殆ど危險に瀕したのが、幸ひにも恢復した。恢復したのはたゞに體ばかりではなかつた。

どちらかといへば母は日頃氣むづかしい人であつた、我儘な人であつた、利己的な人であつた。

けれども今病院のベッドの上に蒼白く憔れた體を横へてゐる母には日頃のその面かげはなかつた、母は日々自分を見舞つてくれた人々に對する感謝の念に充ちてゐるやうであつた、そしてその人々に報いようとする心が無意識に動いてゐるやうであつた。

「體の苦痛は却てその人の心を救ふ!」と私は考へた、そして母の病んだ事をむしろ喜びたい氣持になつた。

○

母になつてからの私の心は、幾度か子供に對する私の愛が、利己的ではないかといふ事をおそれる。私の心は二六時中子供からはなれない。が私は私が子供の外、他人に對する義務を負うてゐる者であつて、ある場合には他人のために子供に對する自分の愛を犧牲にしなければならぬのであることを考へる。

自分の最愛の者を眼の前に殺されても、厳として節を變へなかつた昔の人を私はしみ〴〵尊敬したい。

落穗集

和田滋一樣から本誌の長い御批評を、淸水仙一樣から感激に滿ちた御感想を、水田壽明樣からは激勵の御文章を頂きましたが紙面が一杯で載せさせて頂く事が出來ませんでした。御芳志の段は厚く御禮申上げます。『血色の文字』を削つてしまつても此處に餘白がたつた一頁しかありませんから、此處に這入るだけ載せることに致しました。

京都の無名樣。若い御婦人が人生の分岐點に御立ちになつての御煩悶御同情致します『結婚前の大なる戀愛よりも、小さくとも結婚後大きく育てゝ行き度い』と云ふ御考へは正當だと考へます。けれども、相手の方があなたと協力して眞面目に愛を育てゝ行き得る人格の方であるかどうかだけは鄭重に御取調べになる必要があると思ひます。

富山茂樣。御家庭の複雜な御事情は御察し致しますが、其の複雜な面倒な中に御自分を處して行くのが本當の生きた學問であることを御承知置き下さいませ。遷居なさることは差し支へないと思ひますが、おうちから斷然關係を御たちになることはあなたのために不利益であると考へます。

稻倉玉子樣。『何故に女子が生れて來たか』と云ふ御疑問ですがどうぞ本誌の扉の文をお讀みになつてそしてもう一度お考へになつて見て下さいませ。

水落あけみ樣。御境遇に御同情致しますと同時に不遇な位置を打ち破つて突き進まうとなさる意氣を尊敬致します。力强い新時代の靑年婦人を一人得たことを無量に私は喜んで居ります。

草間判二樣より。草刈をなしつゝ『咲いた櫻になぜ駒つなぐ駒が勇めば花が散る』の俗謠を思ひ出しました。そして多恨の情を籠めて歌つて見ました。妙齡の處女に男子を近づけるの危險を歌つたものとも見る事が出來ると思ひます。否歌ひ得て妙と云ひたいのです。一は散らん事を憂へ一は散らざらん事を憂ふ。兩者敢へて近づくべからずと思ひます。……………餘生を妻の墓の掃除に送つたと云ふミル氏の夫人は初め思友の妻であつた事を知つてミル氏夫妻に對する尊敬の念は地を拂つて消へました。夫テーラー氏生存中夫の親友ミル氏に異常の愛情を捧げたるものゝ如きは稍淫奔の嫌ひはないでせうか(精神的に)又思友の沒後彼女と婚したミル氏は思友に對して不人情ではないでせうか？之を思ふて不快を感じます。



私の生立

一寒村の農家に七人目の子として生れた私は實はあつても無くてもいゝ、否、むしろ、厄介者であつたやうに思ひます。祖父母に男の子か無かつたために私の父は他家から婿入りして來た者であるのですが、父は氣丈な祖母の氣に入りませんでした。祖母は自分が貰つて娘に娶せて置きながら、其の氣に入らない婿を夫としてかしづいてゐる娘迄もが癪にさはると云ふ風にこと〳〵に母にあたつて居たやうであります。ですから、母が姙娠する度に祖母の機嫌は一層惡くなつて、まるで不義でもしたやうに口汚なく罵つたそうであります。それでも二人か三人の子供でありましたなら左程でもなかつたでせうが、五人目六人目になると又か〳〵と云ふやうな顏してますます祖母の機嫌が惡くなるのに其の五人も六人も突破して、七人目に母の胎内にやどつた私は本當に災難であつたのです。

今から考へても其の頃の自分が私は可哀想でなりません。祖母はいろんな皮肉な小言を母に浴せてゐたそうでありますが、終には云ふことがなくなつて

『子を生むもいゝが、あんまり生むので名に困る』

と私の父母の前でどなつたと云ふことですが、それでも生まれた以上は名が無くては何にかと不便



であつたのでせう。とにかく、私も一つの名をつけて貰ふ惠みにあづかつたと見へます。

でも、もし、私が最終の子であつたなら、まだよかつたでせうが、私の後から、又二人女が生まれました。そんな風でありましたから、私の父母は子供が多いと云ふことだけでも可なり骨が折れるのに、祖母に對する氣兼から、殆んど子供をいつくしむと云ふやうな餘裕を持たなかつたのかも知れません。私は父母から優しくされたり、可愛いがられたりした覺へが殆んどありません。

祖母から優しくされた記憶は猶更ありません。唯、一ツ覺へて居るのは、隣村の祭禮の日に祖母はめづらしく私を連れて行つてやると云ひ出しました。強いおばアさんですけれどおまつりに行くのが嬉しくて私は着物を着かへさせて貰つていそ〳〵と祖母に付いて歩きました。おばアさんが傍に居るのも忘れて私は、青い山と青い田の間にハタ〳〵とひるがへつてゐる白い勇しいのぼりに歩きながら見惚れてゐました。するとお祖母さんは持つてゐた洋傘でいきなり私の足を横なぐりになぐりました。私はびつくりして立ちどまると祖母は、

「お前の歩きようは何てざまだ。女のくせに外輪で！おまけに大股で！こうしてお歩き。」

といつて私より先きへ出て、そして、丁寧に八の字を畫がいて歩いて見せて呉れました。私は祖母から叱られ〳〵していつの間にか、うちわに歩くやうになりました。けれども、後に洋服を着るやうになつた時、今度は内輪が可笑しいと云つて皆からさん〴〵笑はれました。今の世の女の苦しい



ことよと私はつく〴〵考へました。勿論それは後の話ですが。

×

私が三ツ位の時であつたと思ひますが、おしやれな祖母は誰が見ても百姓家の婦人のやうではなかつたそうです。母も村とは云はず、郡内での評判の別嬪であつたので母子して外へ行く時には立派に都會人として通つてゐたのだそうです。或る夏祖母と母は小さい私を連れて三崎に住んでゐる親類へお客に行きました。其の親類では早速舟を雇つて城ケ島へ遊びに出かけたそうです。祖母も母もすつかりおめかしをして舟に乗り込みました。船頭が親類のうちの女房に

「どちらからのお客様ですか?」

と聞きましたそうです。すると女房が此處だと云ふやうな顔して、

「あの――東京からのお客様ですよ。」

さ、かん高に云つてすましてゐると、祖母も母も大得意になつてわざ〳〵キレイな言葉を選んで使つてあつぱれ東京人を氣どつてゐたそうです。すると舟のへりにつかまつて一心に、水の中をのぞいてゐた私が

「ああ、でッけへ魚がゐらア! でッけへ奴だ!」

さ大聲あげて田舎言葉をふりまはしたので、すつかりメッケの皮が現はれたそうです。



私が大きくなつてから、祖母は時々その時の事を云ひ出して

『本當に此の子は、小さい時から無えんりよな仕方のない奴だつた！』

と私に小言を言ひましたが、私は私がまだ無意識なうちに、驕慢な虚飾な祖母の鼻柱を小氣味よく折つてやつたやうな氣がして其の時の自分が痛快でなりませんでした。

でも、もし祖母が年から年中こわいばかりなら、終には、あたし達は絶對に、祖母を嫌ふやうになつたでせうが、祖母はお正月や、村のお祭がくると必ず、おひねりを子供等の數だけ、こしらへで一人々々隱居所へ呼んで、お小使ひとしてめい／＼にくれました。そして、それはふだんは決して持たされたことがないだけの金額でした。その時は、本當に立派ないいおばアさんだつたのです。きれる時に、キレイにきれるので、それでおばアさんには權威があつたのです。

×

或る年の村のおまつりに利口者であつた、私のすぐ上の兄は自分の貰つたお金を天保錢にかへて、そして、うすぼんやりしてゐる私の持つてゐる銅貨とみんな取りかへてしまいました。

『お前の持つてゐる一錢銅貨や二錢銅貨より、此の天保錢の方がよつぽど大きいぞ。大きいからこれで買つた方が、何を買つてもたんと來るぞ。お前はいい子だからお前の持つてゐる銅貨の數だけ、此の天保錢と取りかへてやろう。』



私は兄の言葉を眞に受けて取りかへてしまいました。すると今度は、私のすぐ下の妹が自分の貰つたお金は小さい箱へ入れて簞笥のひきだしへしまつて置いて、そして、始終、私のお尻へくつついてゐて、私が何かを買ふたんびに私にねだつて少しづゝ貰つて、自分は買ひませんでした。馬鹿な私は兄にはこみやられ、妹からはねだられて、外のものがまだ澤山持つてゐるうちにいつも一文なしになつてしまつてベソをかいてゐました。

×

夏などは大抵私は眞裸體で砂の中をころがつたり、泉水の中の鮒や蛙を捕へて遊んでゐました。赤蛙を見付けると、田の中でも畑の中でもかまはず追つかけて行つて捕へて――眞裸體ですから着物をよごして叱られるなどと云ふ心配はありません――そして、いきなり皮をむいて、はゝの廣い草の葉につつんで置いて、そして、うちへ歸つた時、燒いて食べました。それは本當にうまいものでありました。併し長い間都會に住んだ後の今は退歩か進歩か氣味が惡くてそんなことは出來なくなりました。

其の頃のことであつたと思ひます。私は兄や姉が學校へ行くのがうらやましくて、いつも後を追ふのでありました。それがいつものことではあるし、うちのものも外(ほか)のことに忙しいので、泣きながらかけ出す私をとめもしなければ又なだめやうともしませんでした。で、一心不亂にかけ出して



餘程走りは走つたのですか、兄や姉の姿は見失ふし、又、學校へ行くにはどの方向であるかも分らなくなつてしまいました。矢張り眞裸體であつたのです。どちらを向いて行けば學校であるか、又どちらを向いて歩けばうちであるかも分らなくなつたので、とある黒板塀の傍に私は泣きながら立つてゐました。田舎のことですから、めつたに人通りもなし、其のうちに泣きつかれて、泣くのはやめて、涙と汗でぐッしよりぬれてゐる手で傍の黒板塀をなでまわして遊んでゐました。其のうちに又、悲しくなつては泣き、泣きつかれては又、黒板塀をなでまわしてゐるうちに顔がまつくろになつてしまつたと見へます其のうちに一人二人が通りましたが、

「どこの子だよ、きたならしい」

と云つたまゝで、行き過ぎてしまいました。

最後に、其處から二三軒をへだてた家の女房(おかみさん)が出て來て

「此の子はさつきから此處に泣いてゐるが、何處の子だか、分りやしない、まア、こつちへおゐで。」

と云つて手を引いて行つて、井戸端で顔を洗つて呉れました。そして、ハハハと笑ひ出して、

「まア、おまはんはわかチヤンぢやないか、どうしてこんな處へ來たの?」

と猶も笑ひながら手を引ひてうちへつれて來て呉れました。そして、母に向つてハハハと笑ひなが



ら、顔がまつくろで誰だか分らなかつたけれども、はだかでおゐでだから女の子と云ふことだけは分つてゐた、と猫も笑ひこけながら歸つて行つてしまいました。

×

五ツ六ツの時から學校を學び始めたのですが、遲生れのために八ツにならなければ學校へは上がれなかつたのでした。けれども、あまりせがまれるのがうるさゝに父は校長に頼んで七ツの時から校內で遊ばせて貰ふことにしました。授業時間には姉の傍に坐つて、始めつからしまい迄おとなしく姉の授業を見てゐました。姉は內氣な娘で自分が讀書する番になると机のあけぶたを上げて机の中に頭をつッこんでしまつて、いくら先生によばれても動きもしません。それを私がもどかしがつて、一生懸命姉のお尻をつッついたものでした。

ですから、やうやく、學齡に達して自分が人並みに授業を受けるやうになつた時には本當に嬉しくて天にも登るやうな心持ちでした。二年三年と無事に普通に經過して行つて、いよ／＼、四年生になると、田舍のことではあり、今から二十七八年も前のことでありますから、生徒の數はずつと少なくなつたために男生徒も女生徒も一所に授業を受けるやうになりました。何事があつても必ず男生徒を先きにしてゐた、其の男生徒と競爭することが本當に私には愉快でした。讀書の時間など、殆んど、男生には口も開かせないやうな勢ひで、先生の質問にも答へるし、音讀も盛んにやると云ふ調



子で、私の勉強熱は殆んど極度に達して、何處迄も突進して行かうとする氣勢を示してゐたのですが、私の親達は私が尋常四年を卒業すると同時にきつぱり退校させることにきめてしまいました。

『自分の名さへ書ければ女は不自由はない。』と父は云ひ、

『男の子のやうな氣質だから、此の上學問させると始末に終へなくなる。からだも大きいし、早くお針を仕込んで嫁にやる算段をしなければならない。』と母は云ひました。そして、

『校長さんに、お詫ながら斷つて來よう。』

と云ひながら、出て行く父の後姿を見て、私はどんなに泣いたでせう。地獄の底に突き落されるやうな氣持でありました。私の父母は悲しんでゐる私に對して無情であつたと云ふよりは、子供の希望なんぞはたあいないものだと思つてゐたやうです。なぜなれば何時迄も泣きじやくつてゐる私を見て父は、

『今は外の子供が行くから行きたがるので、なアに、二三日もすれば忘れてしまうだろう。』

と云つてゐました。

凡てがそう云ふ調子で私は父母から特に不足にされた覺へもありませんが、又、可愛いがられた記憶もなく、希望などは殆んど滿して貰つたことはありませんでした。町に住む親類の子供が人形を持つてゐたり、美しい着物を着たりしてゐると自分には持てないものだとは承知してゐながら、



ためしにそつとれだつて見たこともあります。けれども、いつも、
『百姓の子のくせに！』と云つて叱られます。學校に行けないのも、この
『百姓の子のくせに！』
と云ふことが先づ重なる理由でありました。隨分悲しい淋しいことであつたのですが、事實百姓の子であつたのですから、遂ひにはどんな希望も百姓の子は持つてはならないものゝやうに思ひ込んでしまいました。美しいもの、おいしいもの、學問などと云ふものは百姓の子の手の屆かない、雲の上のものであるやうに思ひこんでしまいました。何にも自分の希望などはかなへて貰ふことの出來ない百姓の子の自分は本當にあつてもなくてもいゝ無價値なものだと思ひ込んでしまいました。

×

或る時、年老いたヨボ〱になつた女乞食が村へ這入つて來ました。そして、お宮の椽の下で寢てゐました。私は其の乞食が可哀そうで仕方がないので、何にか持ち出しては其の乞食にやりました。
『餘計なことをするな。』
と叱られて、それからは自分の食べる分をかくして置いて持つて行つてやらうとしました。あまり熱心な其の態度が家人の注意を引き、それから、近所の評判になりました。
『お前はあの乞食の子なんだろう。』



と遊び仲間にからかはれました。畑の茄子や南瓜が夜のうちに盗まれた時に、すぐ上の兄が

『あれはきつとおわかが盗んであの乞食にやつたのだ。』

と云ひました。私は口惜しくて悲しくて一日泣いてゐました。母が見兼て私をなだめにかゝりました。

『私が盗みもしないのに兄チャンが盗んだつて云つた。……みんなが、私はあの乞食の子だつて云つた。』

こう云つてじだんだ踏んで猶一層強く泣きました。母は聲に力を入れて

『お前が餘計なこと計りするから、そんなことを云はれるのだ。決して乞食が來ても何かやつたりなどしないがいゝ。』

母は私に意見をするのでした。

×

さうした私の幼年時代は悲しいことや苦しいこと計りのやうでありますが、愉快なことの二ツや三ツ、又、思ひ出せないこともありません。そして、それは大抵取入れ時の農業地が活氣を呈してゐた時でありました。家族の生活資料は全部うちで造るのが原則になつてゐた私のうちでは砂糖をも造るのでした。晩秋の晴れた空にヒシン〳〵と云ふ冴へた響をたてゝうち中の者が畑の砂糖キビ



を折るのでした。取り入れた其の砂糖キビを家ののきの下へ山と積んで置いて、そして、翌くる朝は家内中が霜を踏んで活動し始めます。作男の第一の仕事は大きなたき火を約十五間四方もある家の前の空地の片隅へ遣ることです。まだうす暗いので、それがあかりの代りにもなるし、勿論あたるためです。私共子供等は勿論皆と一所に起き出して其の火のまわりに集まります。そして、その次には其の空地の眞中へ三本の轆轤（ろくろ）を据へます。そして、眞中の轆轤の頭へ長い丸太を結へ付けて其の丸太の端を牛（うし）に引かせて其の轆轤を廻すのです。これは私の祖父が砂糖キビをひくために工夫した方法なのです。

私達子供等は牛のお手傳ひをして其の丸太につかまつて押してやりました。私達が押してやると餘程輕くなると見へて牛の足どりがずん／＼早くなります。祖父や下男が喜んで

『しつかりやれ／＼。』

とはやし立てます。私達は圖にのつて眞赤になつて押してやります。そして、それにくたびれると轆轤の蓋を傳はつて、そして、横にすへてある大桶の中にチョロ／＼／＼と流れてゐる砂糖キビの汁を、砂糖キビの葉をおチョコにしてすくつてのみます。一方には一石も這入りそうな大きな釜が煮立つてゐて、もう餘程煮つまつた汁がドロ／＼と蜜のやうになつてゐます。小さいお茶腕を持つてそれを貰いに行くと釜番をしてゐる人は、いつでも快よく其れを少しつゝすくつてくれます。



私達は丁度小さい鼠のやうにはしつこく彼方此方を走り廻るのでした。

×

學校を下がつてからはお針のお稽古に行くのでしたが、併し、それは農事の暇な時だけに限られてあるのでした。夏の暑い盛りに稲が花を持つ前に田の草取りを終つてからは、一年間に食べる麥を皆搗いて置くのでした。朝早くから搗き始めてお晝迄續けてそれから、お晝を食べてから二時間計りは家内中が晝寝をするのでした。祖父母も下女下男も外の子供等も皆適宜な場所を選んでグー〱〱〱眠つてゐます。其の間に私は學校で習つた讀本を取り出して蟬しぐれを耳にしながら静かに複習をしてゐました。近所の百姓達も勿論晝寝時で、コツとの音も立てません。飼犬さへも涼しそうなかしの木の下でなが〱とねてゐます。

目覺めてゐるものは私と蟬と、それから、むしろの上にひろげて乾してある半搗き麥の上をゆう〱と飛んでゐる蜻蛉（とんぼ）だけです。棒を持つて追ひ廻す子供等も見へなければ、いつも忙しそうにパタ〱音をたゝてゐる百姓達も寝しづまつてゐるので、蜻蛉は我が時來れりと云ふやうに悠々とスーツと眞直に飛んでは或る點迄行くとクツと方向を變へて、又、悠々と薄い羽を強い日光に反射させて飛んでゐました。

私も、果しもない空想の翼をひろげて、はなやかな夏の空を見上げて居るのでした。

編輯を終りて

この小さな『婦人と新社會』も皆樣の豫想外なる御同情によりましていよ〳〵半歳も過ぎ、第七號が生れました。皆樣の御芳志を厚く御禮申上げます。

皆樣の御同情によりまして案外なる部數を出して居りますにも拘らず高い諸物價は、此の雜誌の經營者阿部仙太郎氏を餘程苦しめたやうで御座います。阿部氏の經營は營利のみが決して目的ではありませんでした創刊號以來の無報酬の御努力には實は私も少なからず感謝して居るので御座いました。けれども毎月々々無駄骨（經濟上の）を折つておゐでになつてゐる處へ、この度の財界の不況の波が少なからず阿部氏を襲ふたのも事實で御座いました。

そんなこんなで私はこの度雜誌の經營をも自分に引き受ければならぬことになりました。

實を申ますと私は自分の學び得たこと、考へ得たことは皆此の誌上へ發表しまして、外の新聞雜誌へ自分の精力を散らすやうなことをせずにシツトリと本誌の讀者の方と一所に研究を進めて行きたい希望なので御座いますが、併し、日々を送るに物質が必要である限り、外の仕事も引き受けねばならないので御座います。のみならず、まだ生れて間のない本誌も自分で自分の生命を維持して行くことが或ひは難しいかとも思つてゐます。そうしますと、それだけ又私が外の仕事をして行かなければならないことになりますのです。

そして、それは私にとつて苦痛なので御座います。どうぞお一人でも多く讀者を御紹介下さいませ。

本誌定價表

册數	定價	送料
一册	金二十五錢	送料五厘
六册	前金 金壹圓四十錢	（送料共）
十二册	前金 金貳圓七十錢	（送料共）

○誌代及郵税は前金の事（郵券代用は五厘切手にて一割增
○廣告は御照會次第御相談いたします

大正九年八月二十三日印刷納本
大正九年九月一日發行

東京四谷區南伊賀町四一
編輯兼發行人　山田嘉吉
東京神田區仲猿樂町十七
印刷人　大杉直次郎
東京四谷區南伊賀町四一
發行所　婦人と新社會